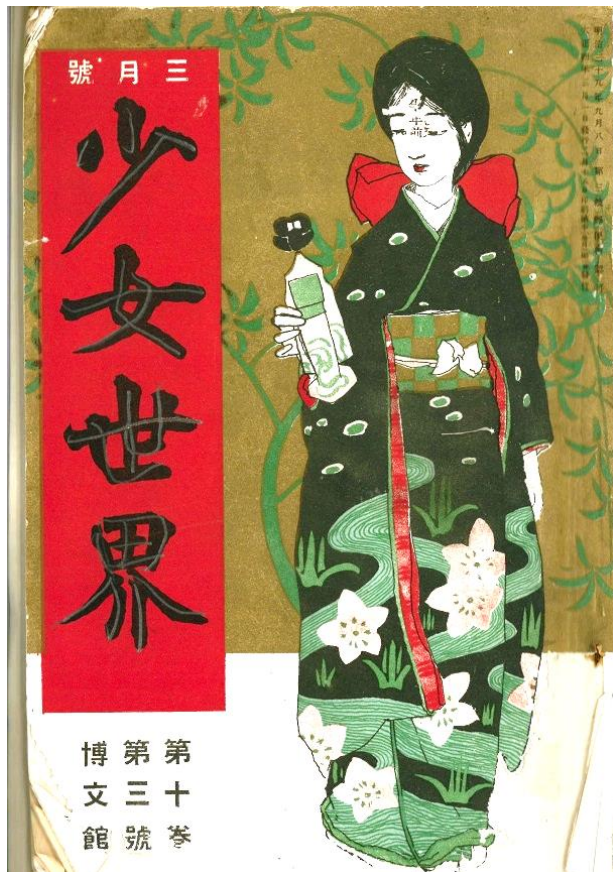




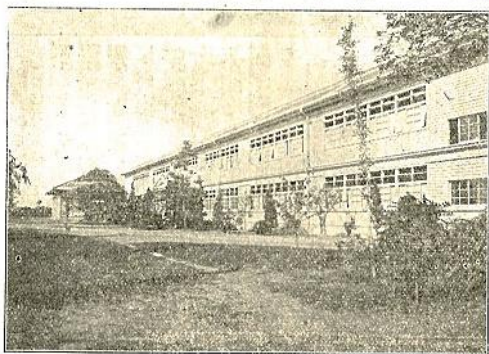
21 雑誌「少女世界」

大正4年(1915)

史料 20 の沼田笠峰が主筆を務めた少女向け雑誌。明治 39 年(1906)に創刊され、昭和 6 年(1931)に廃刊になるまで博文館で発行されました。展示部分は文部省唱歌「ふじの山」を作詞した巖谷小波が
大正4年1月下旬に前橋高等女学校や富岡製糸場で講演した記事です。写真は新築したばかりの群馬県立前橋高等女学校。この雑誌は県内でも小学生から女学生まで広く読まれていたようです。

上原定一郎家旧蔵文書「少女世界 三月号」(P09505 1150)

▲それから二十五日には、高等女学校でもお話ししました。その学校はまだほんの新築です。序に寄宿舍も見せてもらいました。これも家族的の自治制度だと云ふ事です。
◎丁度、私の見てまはつた時は、午後のおやつ時間だったので、此の室では大福餅、彼らの室ではビスケットと、思ひのお茶うけで、楽しくお茶を飲んで居るつしやる所でした。お邪魔をしたのを御詫びします。
▲富岡でも一晩泊まつて、此所の少女方には、原、富岡製糸所と、實科女学校とで目に掛りました。製糸所では第一倍楽館に、七八百人の女工さんが集まつて、夜の七時から八時過まで、よく私の話を聞てくれました。



◎此の人造の仕事して居る所は、その日の午後の中に大久保所長の案内で、委しく見せてもらひましたが、日本の一番大切な國産が、かうしてかう云ふ纖弱い手先で、如何に見事に作り上げられるかと云ふ事が、初めてよく解りました。
▲次の朝は實科女学校でした。此学校は郡立ですが、蓋し縣内唯一の郡立で、生徒こそ少けれど、其成績の著しいのは、縣下でも評判だと云ふ事です。彼の有名な妙義や浅間は、この学校や製糸所からは、つい庭の前の様に見えます。
◎月が代つて二月には、七月に宅で春遊会を開き、紀元節には川越の高等女学校と、小石川の淑徳女学校とへ行きます。そのお話しは、此次に(前分の日)

木の芽 小波



▲正月は九日から名古屋へ行つて、彼のいとう呉服店で開いた、子供會に二日づけて出ました。いつもながらあの綺麗な會場で、可愛い方を澤山見る事の出来たのは、どんなに嬉しい事でしたらう！
◎九日の晩の事で、呉服店の伊藤さんに誘はれて、國技館に開演中の、大竹一座の少女曲馬を見ました。曲馬とは云ふもの、むしろ曲藝が主でした。そしてその曲藝の振つて居た事には、誰も感心しない者はあまりすまい。
▲小いの七歳から、大きいのは十八九までの少

女！それがまるで子猿の様に、種々な離れ業を、さもなく無造作にやつてのける手際は、練習の効とは云ひながら、實に驚いたものでした。元日から十日間、晝夜二回の開演に、八千人も入らうと云ふ大會場が、いつも大人なの無理はありません。
◎名古屋の歸途には、東海道の見聞に寄りました。これは友達を訪ねたのでしたが、その序に磐田座で、二千人許りの小學校生徒に、一回お話をする事になりました。其席には又この町の、實科女学校の生徒さんも見えたやうです。
▲この見聞には、大久保大將の御邸があるのですが、御主人は御不在だと聞いて居ましたのに、其後間もなく大將は、御病氣で御薨去になりました。なまじ御邸を見て来た丈、一層哀悼の念に堪へません。
◎二十三日から五日にかけては、群馬縣の前橋市と、富岡町とへ出かけました。これも例の口演の爲めでした。それで前橋では、公園の臨江閣と云ふ、立派な會場でお話ししました。聴いて居たのは市内各小學校の、尋常三四年の男女二千八人計り。